

中国文化のレシピ——1935年の読経問題

Recipes for Chinese Culture: On the Problem of Studying Confucian Classics in 1935

鏡屋 一

(Abumiya Hajime)

Abstract :

In 1935, there was an intensification of the debate on whether or not to make students read the Confucian classics in school. Those who wanted to make reading of the classics compulsory argued that if this kind of study was not revived, there was a danger that Chinese cultural traditions would be lost to the Chinese people.

This paper sets out to analyze opinions as recorded in the May 1935 special issue of the journal, "The Educational Review", on the revival of education aimed at reading the Confucian classics. They also clarify how reading of the classics should be implemented so as to enable Chinese traditions to be maintained, and what kind of canons should be combined in such a way that the product resulting from the education takes the form of splendid "Chinese".

In this paper, I have set out my observations on "recipes" for producing that kind of Chinese culture. The "recipes" comprise judicious selections from the 13 Classics which constitute the important canons of Confucianism, and it was provoked by the ideological movement of the Koumingtang at that time.

キーワード：中国文化、儒教、読経

Key Word : Chinese culture, Confucianism, Studying Confucian Classics

はじめに

1935年の中国では「読経問題」すなわち学校で儒教の経典を読ませるべきか否かをめぐる論争が激化していた。公教育において読経が廃止されてより20年以上にわたり燻ぶり続けてきた論争である。

清末の制度改革の一環である科挙の廃止後、学部は忠君・愛国・尚公・尚武・尚實の五つを教育宗旨として上奏し、各学堂では「経学」を必修科目とし、孔子誕生日には学校で式典を行なうことなどを提示した。清朝に替わる「革命政権」である中華民国は、近代的国家としての制度化推進を図り、1912年2月「普通教育暫

行弁法」によって「小学読経科一律廃止」を決めた。それ以後、読経教育の是非をめぐり長い論争が開始された¹⁾。

1935年の時点において読経の授業が必須だと主張する論者たちの危機感は、中国人が中国人であるための保証、中国人を再生産するメカニズムの確保が必要だとされる現実に発している。彼らにとって、儒教の経典とは中国固有の文化の源泉、換言すれば中国人の再生産メカニズムの源泉にほかならなかった。

本稿の主要な関心の対象は『教育雑誌』の特集にみる読経教育復活論である。復活論では、各段階の学校において、具体的にどのような形

で読経教育を施すべきかが語られている。それは逆説的に、どのような經典教育を施せば、中国文化の、すなわち中国人再生産装置の必要条件が満たされると考えているのかが明かにされていると解釈しうる。

レシピ (recipe) とは、本来、料理の材料や調理法を記したものを指して言う。1935年の読経問題について意見を発表した人々にとって、どのような材料をどのように配合すればあるべき中国人ができあがると考えられていたのだろうか。すなわち、彼らのつくる中国文化の「レシピ」とは如何なるものであったのだろうか。

本稿は、そういった「レシピ」の態様を明かにし、それがもたらされた歴史的環境について考察することを目的としている。

I. 読経問題論争

A. 『教育雑誌』読経問題特集号の刊行

上海商務印書館が1909年以来刊行してきた『教育雑誌』は、1932年の上海事変で日本軍に印刷所を空爆されたため1934年8月まで休刊していた。「読経問題特集号」が刊行されたのは復刊まもない1935年5月のことである。

1935年という時点において読経問題の特集が必要だった理由は何か。それは当時の中国における思想的混乱と国難の深刻さに対処する方策として学童に対する儒教教育の復活を求める意見が噴出してきており、その教育現場への投影として、学校における読経授業の開設が世論の一部となりつつあり、教育専門雑誌として何らかの調査をする必要に迫られたからである。

雑誌編集者が武昌においてある識者の意見に接したことが特集企画の直接的な契機であった。その識者は次のようなかたちで問題を指摘していた。

「私の観察では、中国人の思想は数千年間、儒家勢力の支配下にあった。……社会全体は、有形無形に儒家思想の支配を受けていた。……中国には一種の中心思想があり、それが儒家思想である⁽²⁾。しかしながら「海禁が開かれ西洋思想と接触してから、この中心思想はしだいに動揺を始めた。結局は保守的色彩が濃厚な張之洞すら『中学為体、西学為用』を主張して妥協

せざるをえなかった。民国8年になって新文化運動が起こった。この運動は破壊の面では確かに大いに功を奏したが、建設の面ではまったく成果がなかった。固有の中心思想は破壊されてしまい、新たな中心思想は建設されておらず、皆を岐路に迷わせた。同時に外来の思想も混乱したままぶつかってきた。左はポリシェヴィズムから右はファシズムにいたるまで、まったく多種多様で何でもありだ。……わが国の現代の青年の煩悶は、このように形成された⁽³⁾」。

新文化運動の儒教批判を頂点とする「中心思想」の破壊と、新文化運動が新たな思想的原理の創造に「失敗」したことに起因する動揺が、現在の混乱の原因であると認識されている。「ポリシェヴィズム」とは江西省の根拠地から陝西省へ「長征」中の中国共産党を、また「ファシズム」とは兵站建設をモデルに国家建設を行いつつある中国国民党政権を示唆している。読経問題の背景には、国家建設の基本路線における亀裂も存在していた。

教育雑誌編集者たちには、特集企画にあたり、もうひとつの動機があった。

それは、九一八事件、すなわち日本軍の中国侵略の端緒となる満州事変以後の中国国内の思想的ムードの変化である。編集者はこう説く。

「わが国は、九一八事件以来、重大な打撃を受けた。民族の生命が、朝にはあっても夕には保てない、という情勢で、悲観的な人は『中国必亡』という論調を出すに至っている。そこで一部の憂国の人は、我々が国運を挽回し思想を正すには、民族の自信を回復しなければならないと考えた。読経は自信を回復するひとつの方法であった⁽⁴⁾」。

当時、読経支持派と反対派とは鋭くせめぎあっていた。例えば次の資料はその様相を物語ってくれている。

1934年5月、教育部は各省教育庁に通令し、中小学校で経書の朗読を強要することを禁止した。「近日各地の初級中学および小学で経書を指定し学生に朗読を強要していることが判明した。……これは本部〔政府教育部〕の頒布した中小学校規定および課程標準の規定に背くだけでなく、学生の負担を重くさせている。そのため

算学と自然科学の成績が日々劣悪になっている⁽⁶⁾」。

1934年8月25日、国民党広東省政府は、陳濟棠の旨意を受け、各機関、学校に対し次を命令した。『孝経新詁』を中小学校の読経教材とする。『経訓読本』を出版し、教科書とする。また、10月13日に「中小学校経訓実施弁法」を公布し、小学では毎週経訓の時間を90分とし、『孝経』および『経訓読本』を教科書とすること、中学では毎週2時間、『四書』を教科書とすることを規定した⁽⁶⁾。

ここから判明するのは、思想的混乱の解消と救国民族主義の沸騰を背景に、各地の教育の現場では、政府の禁止する読経を密かに生徒に強要するようになっているという事実である。しかも政府が黙認できず禁止令を出さざるを得ないほどまでに、読経が支持されてきている様子がうかがえる。

しかし、教育雑誌の編者たちは、読経の提唱が国運を挽回し思想を正す唯一の正当な方法であるかどうかは、なお議論の余地があり、検討が必要な問題であると感じていた。そこで読経授業の設置に対する賛否両論をアンケートの形で収集し、「論争」の輪郭を把握しようとした。これについて編者たちは次のように述べる。「我々は如何なる問題でも、主張すべきは主張しつつ、反対すべきは反対しつつ、結論は得られなくとも、双方が互いの意見を開陳し弁論しあい、双方の理由を天下の人に知らしめれば、見識のある読者には必ず良好な参考となり、この問題に対する自己の態度を決定するであろう。これが、この雑誌がこの専号を出版する意図である⁽⁷⁾」と。

B. アンケート調査結果—誰が何を主張しているか

教育雑誌は百人余りに意見を求め70余件の回答を得た。雑誌編集部は、各種の意見を整理するにあたり、小中学で読経をすべきかどうかの一点に基づいて、全回答を分析し、次の三分類を得た。つまり、(1)全面的に賛成する者、(2)部分的に賛成か、部分的に反対である者、(3)全面的に反対する者、である。

数として多いのは(2)部分的賛成または反対の意見であるが、各々その程度は異なっている。小学から始め、量を考えて実施するという意見があり、中学から始めるべき、あるいは大学から始めるべきだという意見もある。またおよそ経書は学校では青年に読ませるべきではなく、専門家に研究させておくだけでよい、という意見もある。

編集部での整理によれば、全面的賛成論と全面的反対論およびその中間を占める部分的意見の分類とその主張者は次のとおりである。煩瑣を恐れず本稿では逐一人名を挙げる。中国現代史において顕著な人物が含まれているからである。

(1) 読経に全面的に賛成する者：

唐文治（無錫国学専修学校）、姚永樸（安徽大学）、陳朝爵（安徽大学）、古直（中山大学）、曾運乾（中山大学）、陳鼎忠（中山大学）、方孝岳（中山大学）、王節（正風文学院）、何鍵（湖南省政府主席）、楊壽昌（嶺南大学）、憶欽（湖南長沙）、雷通羣（中山大学）、錢其博（光華大学）、顧實（江蘇教育学院）、鄭師許（交通大学）、江亢虎（上海）、以上16名である。みな読経を主張する以外に、課程の分配、いかなる読法か、どの経を読むか、などについて具体的な意見を提出している。

(2) 読経に部分的賛成—(a)初級小学は不可、高級小学以上は可とする者：

李蒸（北平師大）、任鴻雋（北平）、陳立夫（南京）、鄭鶴聲（南京）、朱君毅（南京）、以上5名である。経は読まなければならないが、全部読むことはできない。その精華を選び、糟粕を棄てる。経中の良言善行について、改編して口語文とし教材とする。必ずしも原文を読まなくてもよいとする。

(2) 読経に部分的賛成—(b)小学は不可、中学以上は可とする者：

蔡元培（中央研究院院長）、李書華（北平研究院）、胡樸安（上海）、王新命（上海）、何清儒（上海）、楊衛玉（上海）、陳鶴琴（上海）、李権時（上海）、繆鎮藩（金陵女子文学院）、劉英士（国立編訳館）、呉自強（南昌中学校長）、崔載陽（中山大学）、以上12名である。彼らは、大学で専門研究とするのと中学で幾篇かを選読

するのはかまわないが、小学の読経は有害無益であると考える。

(2)読経に部分的賛成—(c)初級中学は不可、高級中学以上は可とする者：

鄭西谷（上海中学校長）、黄翼（浙江大学）、章益（復旦大学）、以上3名である。初中以下では読経はよろしくない、少なくとも高中からやるべきだと考える。

(2)読経に部分的賛成—(d)中学以下は不可とする者：

范壽康（武漢大学）、謝循初（安徽大学）、陳鍾凡（中山大学）、趙廷為（中央大学）、陳禮江（江蘇教育学院）、方天游（江蘇教育学院）、朱秉国（江蘇教育学院）、陳柱尊（交通大学）、陳高備（暨南大学）、傅東華（『文学』主編）、以上10名である。経書を自由に研究するのは構わないが、中学以下の学生に読ませるべきではないとする。

(2)読経に部分的賛成—(e)専門家は可、青年（学生）は不可とする者：

杜佐周（厦門大学）、高覺敷（勸業大学）、姜琦（湖北教育学院院長）、程時燦（江西教育庁長）、高踐四（江蘇教育学院院長）、蔣復璁（南京中央図書館館長）、劉百閔（日本研究会）、吳研因（教育部）、倪塵因（中央大学）、陳望道（上海『太白』主編）、謝六逸（復旦大学）、孫寒冰（復旦大学）、王治心（滬江大学）、江問漁（中華職教社）、周憲文（日本留学生監督）、以上15名である。彼らは、経学には研究の価値がないわけではないが、専門家が没頭して研究するものであって、青年が古紙の山に向かって生活の糧を得るようなことをしてはならないと考える。

(3)読経に全面的に反対するもの：

翁文灝（北平地質調査所所長）、尚仲衣（北京大学）、王西徵（北京大学）、陶希聖（北京大学）、劉南陔（武漢大学）、林礪儒（勸業大学）、吳家鎮（厦門大学）、周予同（安徽大学）、柳亜子（上海）、曾作忠（暨南大学）、葉青（上海辛墾書店総編集）、武昌中華大学中国文学系同人、以上12名である⁶⁾。

以上をみれば、総体として大学教員が多く、小中学の教員を欠くことがわかる。陳鶴琴など

幼児教育で貢献した人物もいるが、概ね中等教育の当事者以外の意見である。

II. 中国文化は如何に作られるか

A. 読経の効能

読経教育の必要性を説く意見として特に大きな影響力を揮った人物に、当時湖南省政府主席、国民党中央執行委員であった何鍵（1887-1956年、湖南省醴陵県、当時48歳）がいる。何鍵は保定軍官学校卒業以来、主に軍務に就いていたが、余暇に国学を研究し、儒家学説を解説する『八徳衍義』『小康與大同』などを著すなど、儒教の保持と普及に関し強い主張を行っていた。

小学校から読経教育が必要であると説く何鍵は、読経の効能を中国の伝統文化と結びつけて理解していた。何鍵は読経と中国固有の文化について大要次のように指摘する。

読経問題が今日盛んになったが、読経は時代が必要とする良薬ではないだろうか。国家が弱り危機にあることは否めない事実である。50年間、貧者弱者の救済のため欧米に倣い、機械から法律、政治、学説、経済、趣味など一切が頻繁に輸入され採用されている。最近ではほぼ十中八九が欧化される勢いである。しかしながら西洋の文明が「ひとたび中土に入ると、橘は桔に変わり、味が全く異なってしまう」。「近来、国内の学者は盲従は良策ではないと感じ、固有の文化を提唱し、文化建設を追求しようとしだしている」。「わが国の固有の文化の淵源はどこから来るのか。歴史に求めると、漢の武帝が経術を尊崇してより二千年余り、上は明経をもって士を取り、下は明経をもって学を為して、一日として中断したことはない。……中国文化は、六経〔五経と楽記〕ができてから、長い時間を経て、基礎がしっかり固まっている。私は固有の文化を提唱するのは時代の要求によるものと考え。よって読経は必ず由るべき路である⁶⁾」。

何鍵は、日本が西洋化しつつも、「大和魂」、「武士道」、「知行合一の精神」をもって発展したことに触れ、他方中国の場合、日本と同じく「維新」をやりながらも、盲目的な西洋化により中国の文化が、すなわち中国「数千年の固有の精神」が消滅するのではないかと危惧してい

る⁴⁰⁾。

すでに何鍵は、1934年10月2日に湖南省政府主席として湖南省教育庁に命令し、「『四書』『五経』は国学の根本であり、八徳〔仁義礼智忠信孝悌〕を講じたければ、必ず読経しなければならない」という主旨に基づき、各級の学校の国文教員を召集し、読経を課程に編入させていた⁴¹⁾。

何鍵の見解は、読経必要論の典型的な類型であるとみてよい。次に、各学校での読経をどのように実施するかにつき、いくつかの草案を「レシピ」として紹介してみたい。

B. 中国文化的レシピ

(1) 江亢虎の場合

江亢虎（1883-1954年、江西省弋陽県出身、当時52歳）は留学等によって早くから日本・米国など海外に学び社会主義思想を吸収し、中国社会党の創立者として知られていた。1921年には社会党代表としてコミンテルン第3回大会に出席したが、まもなくソ連批判に傾き、1934年には上海で存文会を設立し、文語文の擁護提唱を行うとともに、蒋介石の「新生活運動」を支持して儒教の徳目を賞揚するようになっていた。

江亢虎の場合は、小学生の無垢な頭脳に経書のエッセンスを注入させることを第一に考えていた。「小学の読経は、ただ暗誦を重んじて、理解できず、精神を虚耗し、脳力を傷損すると疑うかもしれない。小学の年齢では、記憶力が強く、理解力が弱い。正にその短所を置き、その長所を用いる。晩成を待てば、知識発達し、幼時の暗誦を自ずから用いようと思ひ、更に興趣を感ずるかも知れない⁴²⁾」と説く。

内容がわからなくても、意味が理解できなくとも、まずは詰め込め、というのが江亢虎の処方である。江亢虎は、そもそも読経の必要性について、大要次のような利点を数えていた。

(1) 群経は中国の古代文化思想の結晶である。中国の古代文化は世界最高の優美を尚ぶ文化の一種である。それ自体の価値、及び過去現在未来の人類への影響は甚大である。ゆえに世界文化へと明瞭に推進するには、読経しなければならない

らない。

(2) 群経は中国先民の自我の創造、精神の遺産である。二帝三王古聖賢の偉大な功績と良言善行は、以って後人に模範を示すに足る。ゆえに国家本位の民族特性を保持し発展させるために、読経しなければならない。

(3) 群経は『二十四史』以前は唯一の百科全書である。およそ上古の歴史、地理、政治、社会、文学、美術などは群経に基づかなければ、系統的な探討をなすことはできない。ゆえに上古の史料を研修するために、読経しなければならない。

(4) 群経は諸子百家が分立する以前に最も普遍的に概括した記載であった。後世の一切の学説はほとんどこれから発生しなかったものはない。ゆえに諸子百家の淵源を知るために、読経しなければならない。

(5) 群経は孔子が刪訂した書である。孔子は中国で最も偉大な一人格である。その精神は、完全に群経に託して表現されている。ゆえに孔子を尊重し儒家を宣揚するために、読経しなければならない。

(6) 群経は中国の道德教育の宝典である。狭義の宗教に代替してもよい。その効用は仏典、コーラン、新旧約聖書と同じである。ゆえに精神文明を提唱し人倫道德を進歩させるために、読経しなければならない。

(7) 群経は中国文学の最高の標準である。かつ一切の文章の体裁は、ことごとく群経から進化して来た。ゆえに文体を正し文風を向上させるために、読経しなければならない⁴³⁾。

このように「群経」すなわち、多くの儒教の経典は「中国の古代文化思想の結晶」であり、「中国の道德教育の宝典である」と説く江亢虎ではあるが、幼い学校生徒に対し膨大な経典を詰め込むにあたっては、やはり順序と処方が必要であった。それはいわば江亢虎の手による「中国古典文化」注入の処方箋である。

江亢虎の処方箋、中国文化的「レシピ」は、その大略以下のとおりである。

(1) 『十三経』はあまりに繁重である。学校の修学期間に読者がそれに依って習慣とすべきは、『論語』『孟子』『孝経』『易』『書』『詩』

『小戴礼記』『左氏春秋』を以て限りとする。『大学』『中庸』の宋以前の読法は、『小戴礼記』中に帰入する。

(2)『論語』『孟子』『孝経』『易』『書』『詩』は群経中最も重要であり、また最も簡潔である。全文を読むべきである。『礼記』『左伝』は節本を読むべきである。約四分の一を取れば足りる。

(3)読経はすべからず朗読すべし。黙読では全部を憶えない。講経は通俗で理解しやすくする。考証は不要である。更に進んで微言大義を略授する。

(4)読経の程序は、まず『論語』、つぎに『孟子』、つぎに『詩経』『書経』『易経』、つぎに『孝経』、つぎに『礼記』節本、『左伝』節本とする。

(5)初級小学では『論語』を読む。高級小学では『孟子』を読む。初級中学では『詩』『書』『易』を読む。高級中学では『孝経』及び『礼記』『左伝』の節本を読む。

(6)読経は白文を重視すべし。注解には拘らない。講経は衆説を兼採し学派を問わない。

(7)普通学校を除き、地方の公費で特設する書院式の研究所は、各学校の国学教員の人材を育成する。経学はその中の重要な一専科たるべし⁴⁴。

この「レシピ」の特徴としては、『論語』『孟子』『孝経』『易』『書』『詩』が最も重要であるとする点、順序としては、まず『論語』、つぎに『孟子』、そして『詩経』『書経』、『易経』、『孝経』、最後に『礼記』節本と『左伝』節本とする点にある。特に『孝経』の順位が後ろになっていることが留意される。また行間から朱熹の集注を称賛していないことがうかがわれるが、興味深いことにこの点は、他の論者の「レ

シピ」にも共通している。宋学を排して漢学に帰る趨勢が見受けられる点は、別の観点からの考察が必要であろう。

「レシピ」の第5項目を比較の便宜のために表にすれば、【表1】のとおりである。備考欄は江亢虎自身の解説を反映させている。

(2)朱君毅の場合

朱君毅(1892-1963年、浙江省江山県、当時43歳)は、コロンビア大学に留学し教育学でPh.D.を取得、帰国後は清華大学、北京大学などの教員を経て、1932年からは国民政府立法院編訳処処長の任に就いていた。

米国留学を経た大学の教員として、そして行政官の一員として、朱君毅の現状認識はこうであった。30年前に科挙が廃止されてから、いかなる学校でも経書が授業科目として教授されたことはなかった。そして現在、その悪影響が現われている。第一に、青年たちは経書の陶冶を受けていないため、中国の「歴史の栄光」、「民族の偉大さ」、「愛国の心」に対する共感が減退してしまっている。第二に、中国古代の「聖賢や豪傑」の「立身の範型」「処世の治事」について青年自身がまったく知識を欠いてしまっている。ヨーロッパの青年たちは人倫道徳をギリシヤやローマの古典から吸収しているのとは対照的に、中国の青年は是非善悪が弁別できなくなっている。第三に、経書を読まないために、白話文ばかりを読むことになり、政府や社会での文書作成に必要な文言能力が失われている⁴⁵。

このような認識に立つ朱君毅は、初等教育、中等教育における読経教育の実施を主張するのだが、朱の場合は、初等小学での読経は他の授業を阻害することを懸念し、高等小学から開始するという「穏健」な主張となっている。

朱君毅には『教育統計学』の専著があり、やがて中央政治学校計政学院教務主任、上海財経学院教授を歴任することになるが、その統計的な手法でもって「レシピ」作成にアプローチしている点は興味深い。

学校生徒の修学期間に十三経全部を教授することは困難であるとする朱は、十三経から適

【表1】

学校	経名	備考
初級小学	論語	小学では読経の時間は全部の教科の5分の1とする。小学の読経は暗誦習熟するのがよい。
高級小学	孟子	
初級中学	詩経、書経、易経	中学では読経の時間は8分の1とする。中学の読経は瀏覽涉獵することとし、『礼記』中の『大学』『中庸』『儒行』『礼運』以外は、その大略を知るのよい。
高級中学	孝経 礼記の節本 左伝の節本	

宜選択を行おうとするのだが、選択の手段として各経書の分量と重要性を調査している。朱は商務印書館所蔵の無註十三経合訂本に収録されている各経書の頁数をまずは【表2】のように提示している⁹⁰⁾。

【表2】

経書種類	頁数	全経書中の百分率
周易	56	3.32
尚書	71	4.21
毛詩	146	8.67
周礼	134	7.95
儀礼	140	8.31
礼記	246	14.60
春秋左伝	496	29.44
春秋公羊伝	120	7.12
春秋穀梁伝	112	6.65
論語	42	2.49
孝経	7	0.41
爾雅	28	1.67
孟子	87	5.16
計 13 種	1685	100.00

同じく十三経といいながら、各経書にある分量の違いが具体的な形で示されている。三礼と春秋とで計1128頁、全体の66.9パーセントを占めることには改めて驚かされる。この統計に基づき朱君毅の想定する各学校段階で読むべき経の種類が決定されている。このいわば朱君毅の中国文化注入の「レシピ」は【表3】のように整理することができる。読経は初等小学では行わず、高級小学から始めるので初等小学4年間の義務教育に障害はないとしている。また最初にむしろ文学的な『毛詩』の鑑賞から始めるなど工夫を凝らしている。彼の計算では、高等小学第1学年から大学第2学年までの10年間において、各レベルの学校で平均毎週2時間を読経の時間とし、全部で5種類の経書を読むことになる⁹¹⁾。

高級小学の『毛詩』について初等中学ではまず『論語』『孟子』を教えるが、『大学』『中庸』は教えないなど、朱君毅の場合も江亢虎と同様に、朱子学から距離を置こうとしている様子がうかがえる。

【表3】

学校	経名	頁数	百分率
高小 (共2年)	毛詩	146	8.67
初中 (共3年)	論語	42	2.49
	孟子	87	5.19
高中 (共3年)	春秋左伝	496	29.44
大学 (第1及第2年)	礼記	246	14.60
計	5種	1017	60.36

(3)憶欽の場合

憶欽（湖南省長沙の人、生没年、略歴未詳）は、学校での読経は人格養成の第一根拠であり、「聖經賢伝はすでにわが国の文化の総根源、立国の真精神であり、以て人心を救正し、民徳を増進し、風俗を淳厚に帰せしむ」、それゆえ小学から読み始めるべきである。なぜなら「小学での読経でこそ、普及するし、風俗を淳厚に帰せしむることができるからだ」と考えている⁹²⁾。

憶欽の準備するレシピは【表4】のとおりである。憶欽は授業としての読経の時間配分を検討し、毎週の国文の授業時間が7時間ある場合、5時間を読経、2時間を読文〔経書以外の講読〕とする。また国文が5時間ある場合、3時間を読経、2時間を読文とする。国文が4時間ある場合、3～2時間を読経、1～2時間を読文とすると提案している⁹³⁾。

【表4】

学校	経名	備考
小学	論語、孝経、曲礼、少儀、内則、爾雅	何れも量に応じて抜粋削除をする。小学生の修養に相応しいものに限る。政治に関わるものははずす。
初級中学	孟子、詩経、檀弓、学記、礼運	檀弓は国文の教材としてもよい。学記、孟子、詩経は全部読むべきである。
高級中学	尚書、王制、文王世子、祭義、祭統、坊記、表記、大学、中庸、春秋左伝	坊記、及び大学、中庸、孝経は、全部読むべきである。その他は量に応じて抜粋削除をする。尚書、左伝は全部読むべきである。
大学 (中国文学系)	易経、儀礼、周礼、周礼、春秋公羊伝、春秋穀梁伝	

上の表中で、書経ではなく尚書と記し、王制、

文王世子、祭義、祭統、坊記、表記と並べて大学、中庸を置くなど、宋学に服さぬ姿勢がうかがえる。

(4)唐文治の場合

唐文治（1865-1954年、江蘇省太倉の人）は早期から儒教教育を受けた清末の進士及第者であり、7歳から読書を始め、14歳で五経を15歳で四書を読み終えている。総理衙門の官僚として日本、英国に派遣されたこともあり、伝統的中国と近代的世界をよく知る人物であった。上海交通大学の前身校で長く教鞭をとり、晩年は長期間、無錫の国学専修館におり、読経問題の意見を出した当時はすでに70歳で、同館の校長の職にあった。

経書は民心を団結させ、民性を涵養し、民気を和平にし、民智を啓発する。それゆえ初級小学から大学文科研究院まですべての学校での読経が必要であると唐文治は考えている⁸⁹。

【表5】

学校	経名（文字数）	備考
初級小学 3年	孝経 (1902字)	孫文の民族主義に言う：孝経の孝はすべてを包む。孝経は愛敬を教える源泉。『孝経大義』
高級小学 3年	大学 (1749字)	孫文の民族主義に言う：中国に系統的政治哲学あり、大学の格致修齊治平である。
	論語の前半 (6893字)	論語：学而篇から郷党篇まで。孝悌忠信、礼義廉恥。
初級中学 3年	論語の後半 (8986字)	論語：先進篇から堯曰篇まで。『論語大義』
	詩経選本	『詩経大義』：倫理学、性情学、政治学、社会学、農事学、軍事学、義理学、修辞学、選詩90余篇。
高級中学 3年	孟子 (36589字)	『孟子大義』
	左伝選本	『左伝選本』八類：礼教類、政治類、国際類、兵事類、諷諫類、文辞類、紀事類、小品類。

【表5】の備考中にある書物『孝経大義』、『論語大義』、『詩経大義』、『孟子大義』は唐文治自身の著作である。経典の文字数を計算し、『論語』を2つに分割するなど、実現可能性を

高める工夫がなされている。

唐文治の「レシピ」の大きな特徴は、孫文『三民主義』の「民族主義」を引用し、最初に『孝経』と『大学』を置くことにある。実は、唐文治と同様に『三民主義』に言及して『孝経』を重視する「レシピ」を作るものが少なくない。例えば、当時、江蘇教育学院教員の顧實（1876年生れ、没年未詳、江蘇省武進県の人）も「両漢の世、『孝経』『論語』はほとんど男女ともかならず読むべき書物であった」と諸経のなかでも『孝経』と『論語』を重んじている。

顧實の見解では、朱熹の集注は『大学』の根本を変えてしまい「夷狄」の君主を認める結果をもたらしている。王陽明以来、多くがこれに反対してきたが、唐文治もまた集注を誤りとみなして、通行する『大学』は使用していない。孫文は孔孟二子をきわめて重視したが、『大学』『中庸』『礼運』の三書については皆古本古注を使用するのがよいとしている⁹⁰。唐文治の「レシピ」中にある『大学』について殊更に孫文『三民主義』に言及しているのはそういう事情が背景にあると考えられる。

読経教育をめぐる中国文化の「レシピ」はさらにいくつかの類型をみることができる。すでに言及したとおり、四書のうち『大学』『中庸』を敢えて避ける者が多く、五経あるいは、十三経中より、『孝経』『論語』『孟子』を初期の読経教育に取り上げている点は、民国期以降の「経学」史を考える上で興味深い問題である。直接的な影響関係の存在を指摘することは難しいが、清末の近代化改革の中で制定された「奏

【表6】

学堂	経名	備考
初等 小学堂	詩経、論語、孟子 礼記節本	毎週講読、12時間
高等 小学堂	詩経、書経、易経 儀礼の喪服伝、 記一篇	毎週講読、12時間
中学堂	春秋左伝、周礼	毎週講読、9時間（「奏定学堂章程」の規定は4時間だが「重訂章程」で9時間に改訂）
大学堂 経学科	周易学、尚書学、 三伝学、周礼学、 孟子学、理学	毛詩学、春秋左伝学、春秋儀礼学、礼記学、論語学、

定学堂章程」における読経教育の布置を踏襲するものであるように見える。因みに、「奏定学堂章程」の読経と講経の各級学堂における課程についての規定を表に整理すれば、【表6】のとおりである²⁹。

Ⅲ. 文化と政治

A. 中国本位文化論

読経問題は純粹に学校教育上の問題ではない。そこには旧満州・華北における日本軍の顕在化と共産党軍に対する国民党軍の包囲掃討戦の激化という焦臭い時代の政治的環境が大きな影を落としている。本稿の主要な関心はすでに示した「レシピ」にあるが、紙幅の許す限り、そのような「レシピ」が発生する背景に注意を払っておきたい。

まず注目しておかなければならないのは、「中国本位文化論」である。

『教育雑誌』特集号には、CC系の陳立夫のほか、王新命、孫寒冰、陶希聖、章益、陳高備など学識経験者が参加していた。彼らはいずれも1935年1月10日の「中国本位の文化建設宣言」発表に関わっていた。1934年4月、陳立夫は南京で「文化建設之前夜」の演説を行い、陳立夫を理事長とする「中国文化建設協会」が設立された。陳立夫の肝煎で発表されたのが王新命ら10名の大学教授の連名による「中国本位の文化建設宣言」であった³⁰。

「中国は文化領域で消失した。中国の政治形態、社会組織、思想の内容と形式は、すでにその特徴を失った。この特徴のない政治、社会、思想によって教育される人民は、次第に中国人とはいえなくなってゆく。よって我々はこう説く。文化の領域から展望すれば、現代世界にはすでに中国はなくなっている。中国の領土には中国人がいなくなったようなものだ。中国が文化の領域で頭を上げることができるのなら、そして中国の政治、社会と思想が中国の特徴をもてるようにするのなら、中国本位の文化建設に従事しなければならない³¹」。

このように述べる彼らの主張の要点は、「中国」という名称は「文化」の記号ではなくなり、中国の政治、社会、思想もみな「中国」という

特徴を消失した。よって「中国」という特徴を世界文化の中に位置づけるために、「中国本位の文化建設」を行なうべきことを提唱することにある。陳立夫、王新命らの読経問題への取り組みは、その前提としてこのような「中国本位文化」論に基づく世論形成の一環であったことが想定される。

B. 新生活運動

共産党軍に対する包囲掃蕩戦の最中の1934年2月19日、南昌の蒋介石が国民生活の「軍事化」を提唱する「新生活運動之要義」の演説を行ない、「新生活運動」が開始された。

5月に制定された規範的文献「新生活運動綱要」では、「国民生活の合理化を求めめるには、中華民族固有の徳性——『礼義廉恥』を基準とし」、「新生活運動とは、礼義廉恥の規律の生活を提唱することである」。「わが中華民族は本来『重礼義』、『明廉恥』の民族である。そして礼義廉恥は今日の建国において、最も切迫し少しも緩めてはならないものである³²」と宣言した。

「新生活運動」は「礼義廉恥」を基準とし、「粗野卑陋」の状態に陥った国民の「衣食住行」に規律を、すなわち清潔と整頓を課すことで国家と民族の「復興」を計るという政治運動であった。

「レシピ」作成者の多くは、今日の中国には精神上の建設が必要であるとして「礼義廉恥」の「四維」の重要性を強調していた。彼らの発言の背後には明かに国民党主導の「新生活運動」が意識されていた。例えば、先に紹介した「レシピ」作成者の一人、湖南省長沙の憶欽は、その点を明確に語っている。

「現在の蒋介石先生の提唱する新生活運動は、その帰宿は、礼義廉恥にある」。そして「礼義廉恥の来源と作用は、完全に経書から出ている」。それゆえ「学校での読経は、当然、人格を養成する第一の根拠であり、絶対に努力して切実に行わなければならない³³」と。

「新生活運動」は国民政府の孔子崇拜と深く関連していた。政府は毎年8月27日の孔子誕生日を国定記念日とし、「孔子紀念歌」を定め、孔廟保護の命令を發布するほか、陳濟棠や何鍵

など政府要人が各地で学校での読経教育を提唱した²⁸⁾。観点を換えれば、学校における読経復活の運動は「新生活運動」の一側面であったとみることができる。

C. 三民主義

国民政府の正統原理は『三民主義』『建国大綱』といった孫文の著作から流出しており、国民党および政府はこれを汲み取ることを可能なかぎり表明し続けねばならなかった。政府は孫文が国家建設の方針を策定するにあたり儒教の徳目を指定したことを利用していた。「中国固有の民族性とは何か。……総理 [孫文] は明確に述べている。それは『三民主義』である。三民主義とは何か。倫理と政治の面で言えば、それは『忠孝仁愛信義和平』に基づくことであり、方法と実行の面で言えば、それは『知難行易』の革命哲学である」と述べる蒋介石にとって、『三民主義』の遵守とは「中国固有の忠孝仁愛信義和平の民族道徳を恢復する」ことにほかならなかった²⁹⁾。

『三民主義』の影響は「レシピ」作成者たちの発言にも見ることができる。

憶欽は「固有の道徳と智識はただ読経から始められる」ことを『三民主義』の「民族主義」第六講によって論証し、「孫先生は絶対に学校での読経の恢復を主張するものである」と結論づけている³⁰⁾。

何鍵は、「立国には民族精神が必要である。孫文先生が言うには、わが民族には忠孝仁愛信義和平の諸徳があり、これがわが国民性である」とし「礼義忠信が実は脳の中の基本信条なのである」と説く³¹⁾。

その点は、中山大学の雷通羣、江蘇教育学院の顧實、「上海文化界救国運動宣言」で知られる光華大学の銭其博らも同様である。『三民主義』はやがて抗日戦争時期には、国共両党を政治的軍事的に統一させる接着剤の役を果たすようになるが、1935年の段階においては、読経必要論の重要な背景であったことがわかる。

むすびにかえて

本稿の主要な関心は、学校での読経教育の具

体的な処方箋を観察することにあつた。実際に提示される「レシピ」は、儒教の主要な經典群である十三経から適宜取捨選択されていた。混乱や腐敗を一掃し規律と規範を与えようとする発想は、しばしば伝統文化から抽出されてくる。しかしながら、すでに指摘したとおり、文化運動の背景に政治的意図があり、伝統文化の復活とはいいいながら、そこにはイデオロギー強化を目的とする操作的取扱いがなされていた。『教育雑誌』「読経問題特集号」には、学校での読経教育に対する反対論も多く掲載されているが、論者の多くは、その点をよく意識しているように見受けられる。

「レシピ」の多くが物語っているのは、この時点における儒教の基盤の根強さである。新文化運動を含む五四運動時期には、徹底的な儒教批判が行われ、倫理の覚醒が呼びかけられたが、しかし実際の影響は主張されているほど「徹底的」ではなく、逆に政治社会の秩序維持の重要な精神的基盤として賞揚されるに至っているという点である。

ある「レシピ」作成者は新文化運動の伝統破壊以後の状況について大要次のように指摘している。「封建的遺物」「陳腐な残存物」と譏り破壊しつつもつたつもりだが、その結果は「人心が離散し、士気が凋落し、思想は混乱し、秩序は紊乱し」「無組織の国家」だと非難されるにいたっている³²⁾、と。

「レシピ」作成者の主張は、国民党および政府の思想統制のための復古志向の道具にすぎぬとしてのみ評価するとすれば、それは不十分であると考えられる。むしろ新たな社会関係や権威構造を作り上げるのに適切な倫理規範を模索し、中国の近代化に適応しうるエトスを古臭い言葉づかいで提示しているように見える。そもそも新文化運動の伝統批判の延長線上には、弱く貧しく分裂した中国を強く豊かで統一された中国に変えてゆくという政治的な課題が存在していたことは留意すべきである。徹底的な西欧化の主張の彼方には統一された強い中国の形象があり、その内実を提示しようとするれば中国らしさを発見すべく様々な伝統が動員されることになった。伝統と近代とは必ずしも二項対立として

理解すべきではないであろう。「読経問題」が
 具えている問題構造は、後発国の近代化推進に
 伴う普遍的な現象として理解すべきではないだ
 ろうか。

〔註〕

- (1) 読経科の廃止については、「教育部關於普通教育暫行弁法及課程標準致副總統呈及各省都督咨」『中華民國史料档案資料彙編』第二輯（江蘇人民出版社、1981年）463頁を参照。またその後の論争および読経問題に対する接近法については、さしあたって、拙稿「孔教会と孔教の国教化—民国初期における政治統合と倫理問題—」（『史峯』第4号、1990年3月）を参照。
- (2) 「全国專家對於読経問題的意見」『教育雜誌』第25巻第5号（読経問題専号）、1935年5月10日、1～2頁。
- (3)(4) 「全国專家對於読経問題的意見」同上、2頁。引用文中の点線……は引用者による省略を示す（以下同様）。
- (5) 陶元徳「中小學生読経」『人間世』第4期（1934年5月21日）、韓達編『評孔紀年』（山東教育出版社、1988年5月）207頁、所収。引用文中の角形括弧〔ブラケット〕は引用者の註である（以下同様）。
- (6) 『廣東政府公報』第270、274期、韓達編『評孔紀年』同上、209～210頁、所収。
- (7) 「全国專家對於読経問題的意見」前掲、2頁。
- (8) 「全国專家對於読経問題的意見」同上、3～4頁。
- (9) 「何鍵先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、同上、11～12頁。
- (10) 「何鍵先生の意見」同上、12頁。
- (11) 韓達編『評孔紀年』前掲、223頁。
- (12) 「江亢虎先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、38頁。
- (13) 「江亢虎先生の意見」同上、37頁。
- (14) 「江亢虎先生の意見」同上、37～38頁。
- (15) 「朱君毅先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、45頁。
- (16) 「朱君毅先生の意見」同上、45～46頁。
- (17) 「朱君毅先生の意見」同上、46頁。
- (18) 「憶欽先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、21頁。
- (19) 「憶欽先生の意見」同上、23頁。
- (20) 「唐文治先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、4～5頁。
- (21) 「顧實先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、29～30頁。
- (22) 「王西徵先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、111頁。
- (23) 当時の儒教と国民政府との関係について、姜林祥・薛君度主編、修建軍副主編『儒学与社会現代化』上巻（廣東教育出版社、2004年10月）432～435頁を参照。
- (24) 「中国本位的文化建設宣言」『文化建設』第1巻第4期、1935年1月10日、蔡尚思主編『中国現代思想史資料簡編』第三巻（浙江人民出版社、1983年）所収、763頁。
- (25) 「新生活運動綱要」『革命文献第六十八輯 新生活運動史料』（中国国民党中央委員会党史委員会、1975年12月）1頁、5頁。新生活運動について、姜林祥・薛君度主編、修建軍副主編『儒学与社会現代化』上巻、前掲、441～443頁を参照。
- (26) 「憶欽先生の意見」前掲、20～21頁。
- (27) 国民政府の孔子崇拜の措置については、中国第二歴史档案館編『中華民國史档案史料彙編』第5輯第1編文化（一）（江蘇古籍出版社、1994年）515～543頁を参照。
- (28) 蔣介石「革命哲学的重要」『中国現代思想史資料簡編』第三巻、前掲、587頁。
- (29) 「憶欽先生の意見」前掲、20頁。
- (30) 「何鍵先生の意見」前掲、11頁。
- (31) 「王節先生の意見」『教育雜誌』第25巻第5号、9頁。